

ダニエル・オストの美

世界中のセレブに愛される花の芸術家 ダニエル・オスト
出雲大社「平成の大遷宮」を祝う

出雲の地で神々に捧げる
「奉祝の花」

“ダニエル・オスト”という名前をご存じだろうか。
母国ベルギー王室のみならず世界中のセレブに愛される、世界の最高峰に立つ花の芸術家だ。
幼いころから植物に親しみ、20代で權威ある数々の世界大会で賞を獲得。ロイヤルウエディングの装飾をはじめ、世界の歴史的建造物を舞台に作品を発表し、“花の建築家”や“花の彫刻家”と

も呼ばれる鬼才である。

日本でも、全国各地のさまざまな会場以至高の芸術美を披露。その都度、独創的で大胆かつ繊細な作品が人々を魅了してきた。中でも京都において、重要文化財に指定された京町家の杉本家住宅でのダニエル・オスト展（1997年秋および2002年春）をはじめ、世界文化遺産では仁和寺（04年11月）、東寺（06年11月および07年3月）、金閣寺（09年3月）を舞台に作品を発表。期待を胸に訪れた多くの人々を感動させたのは、歴史的建造物とそれを取り

まく空間さえも作品となつて展開する彼の世界観であつた。

そして今秋、心魂を傾ける作品が、出雲大社「平成の大遷宮」奉祝事業として出雲大社での献花、ならびに出雲文化伝承館を舞台に姿をあらわす。

“いけばなに通じる深い精神美

ダニエル・オストが創造するのは、色彩と造形による絶対的なまでの美の世界だ。それは、見慣れた既存空間が想像をはるかに超えた異次元の美へと

文 三代久子

写真 宮野正喜

中島清一

柴田明蘭

萱野雄一

協力 ダニエル・オスト事務局

出雲キルト美術館



《ダニエル・オスト展 in 金閣寺》
2009年／縦に裂いた竹約2万枚を使用した作品。竹はダニエル・オスト氏の作品に欠かせない花材である。



16ページ (ダニエル・オスト展 in 仁和寺2004年)
17ページ上 (ダニエル・オスト展 in 金閣寺2009年)
左/ダニエル・オスト氏。昨年1月、出雲大社を訪れた際に松の参道にて。

彼は冒頭で、この作品集は「愛の告白」であり、自分の生まれ育った世界と日本、「わたしが大切に想う二つの世界の幸福な融合」であるとし、「フローラル・アートにおいての完璧な技術と、人の弱さとの間のバランスを探り続けていく道のりの記録である」と記す。

ダニエル・オストの作品集は、いずれも高い評価を得ている。それは、数日間、足跡もなく消え去ってしまう作品が発する真の想い、つまり「いのち」が凝縮されているからかもしれない。

圧倒的な迫力で語りかけてくるのは、彼の人間性そのものだ。

出雲の地で、間もなく、ダニエル・オストの美の世界が目撃できる。

という願いが皆の心の中にあるかのよう。」



変容する瞬間である。同時に、たおやかで力強く、懐かしさを覚えるほど包み込むような彼独特の美は、対峙する者の心まで融和させる迫力を放つ。

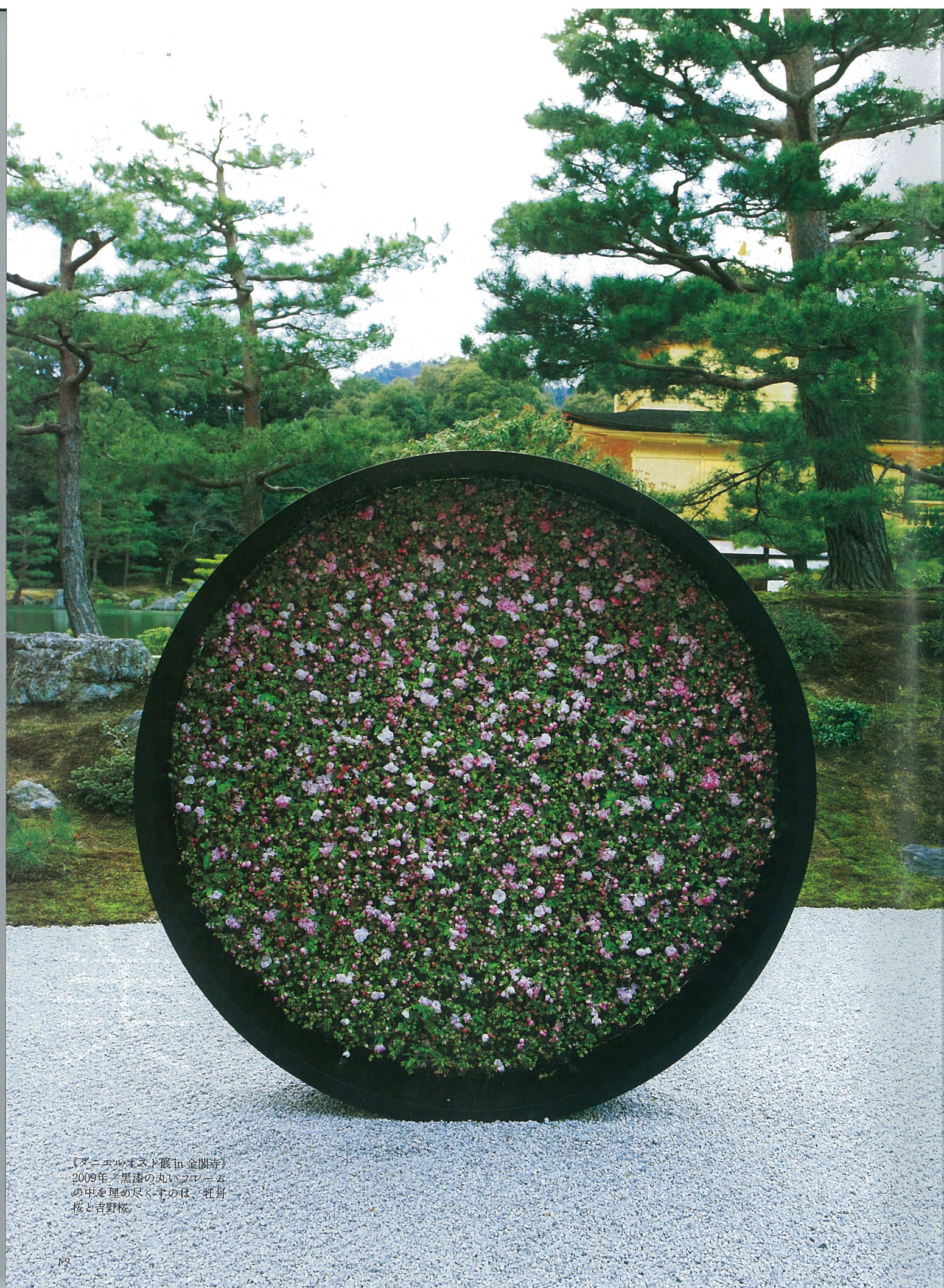
国籍を問わず世界中で絶賛されるダニエル・オストは、東洋、特に日本で評価が高い。それは、「いけばな」という日本古来の伝統と無関係ではないだろう。

私たち日本人は、美しい四季の移ろいの中、生きとし生けるもの、あるいは心によつてのみ感得するものさえも、すべてを五感で愛おしんできた。花を生けるというその行為にさえも、草木のいのちを思いながら、悟りにまで至ろうとする深い精神性が備わっている。

ダニエル・オストの世界もまた、単に花というモノを使って美を創造することではない。

彼の想いを、DANIEL OST 第5作品集『EAST・WEST』の言葉から拾ってみる。

「日本人は、自国の芸術の中で、自らを守る術をもたない自然界に対して洗練された敬意をあらわしている。日本の華道においては、観察することよりも、観想することの方が大切だとされてきた。自然の事象は、その真髄を主体的に映し出す力を持つからだ。花の姿だけではなく、なによりも花の性格、そして花がかきたてる想いが大切だという。まるで自然のすべてと一つになりたい



《ダニエル・オスト展 in 金閣寺》
2009年／黒漆の丸いフレーム
の中を埋め尽くすのは、牡丹
桜と吉野桜。



《ダニエル・オスト展 in 金閣寺》2009年／花器は竹、花材は利休草、黒百合、貝母百合、西洋オダマキなど。

ダニエル・オスト
1955年ベルギーに生まれ、
3歳から植物に親しむ。ベルギ
ーカップ優勝や90年大阪花の万
博金賞など、数々の権威あるフ
ラワーデザインの競技会で受賞
多数。99年ベルギー王国皇太子
の結婚式でサンミッシェル大聖
堂を飾ったのをはじめ、ヨルダ
ン王国の世界文化遺産ペトラな
ど歴史的建造物でのウェディン
グ装飾や、世界各地でのレセプ
ション、パーティー、ファッシ
ョンショーなどの装飾を手がける。
世界中に弟子やファンも多い。
日本には度々訪れ、京都の仁和寺、
東寺、金閣寺など歴史的建造物
での作品展も数多く開催。西洋
と東洋の美が融合した彼独特の
表現が大きな反響を呼ぶ。また、
第3作目作品集が英国ドンサイ
ド展で「世界で一番美しい本」
銀賞を受賞するなど、彼の作品
集はいずれも世界中から絶賛さ
れている。2013年10月、出
雲大社「平成の大遷宮」奉祝事
業として出雲大社に献花、なら
びに「出雲奉祝の花」を鳥根県
出雲市にある出雲文化伝承館で
開催予定。



西洋と東洋の美

神々に捧げる出雲奉祝の花

フラワーアーティスト

ダニエルオスト

文 三代久子

撮影 古川 誠

萱野雄一

宮野正喜

中島清一

芳賀元昌

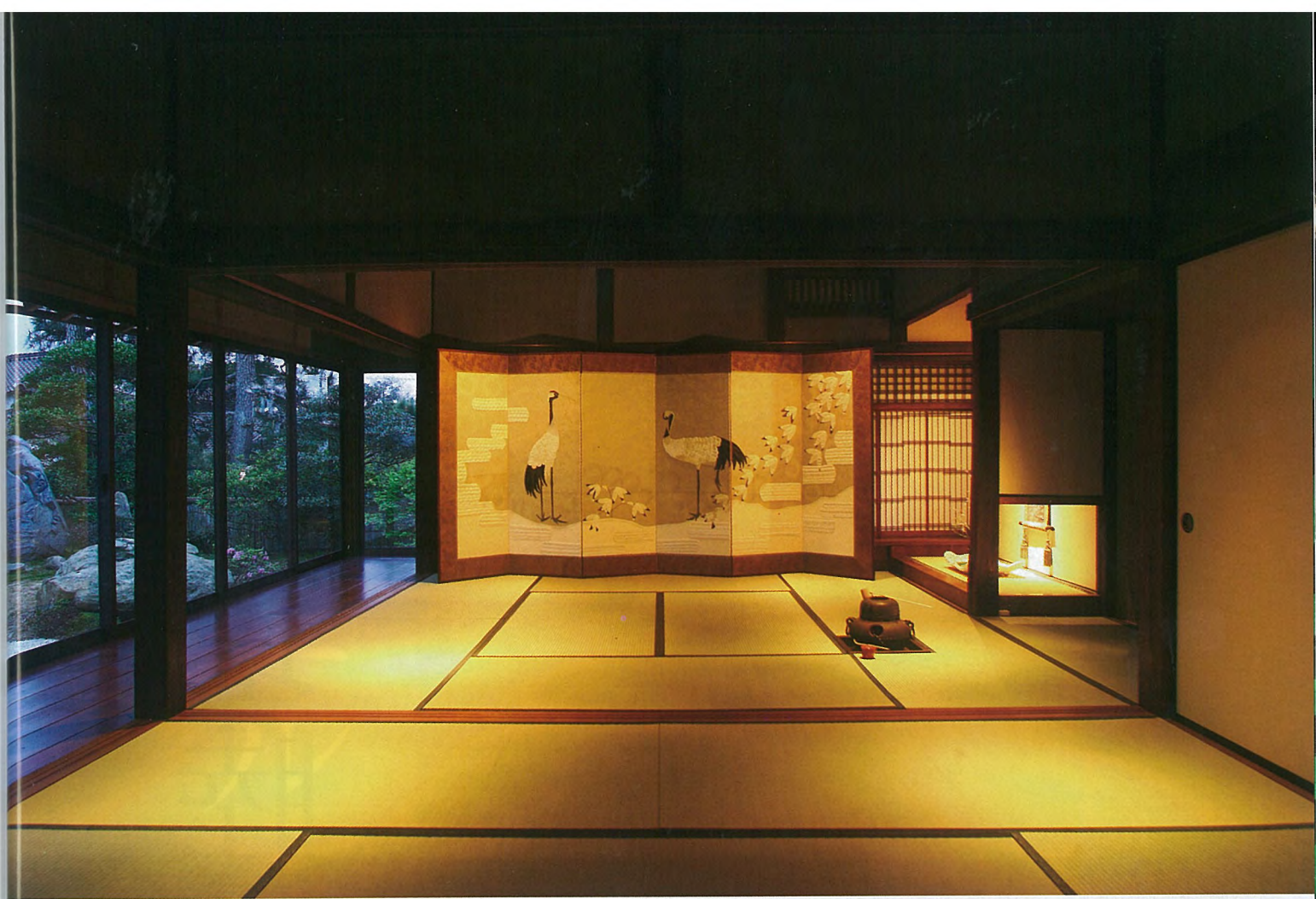
協力 ダニエル・オスト事務局
出雲キルト美術館

キルト作家

八幡垣睦子

世界的なフラワーアーティスト、ダニエル・オストさんと出雲の地から国内外に作品を発表するキルト作家、八幡垣睦子さんが今秋、「出雲奉祝の花・ダニエル・オスト、八幡垣・織アート」と題して出雲文化伝承館において「花」と「織」の作品を展示する。これは、出雲大社・平成の大遷宮「奉祝事業として行われるものだ。出雲キルト美術館に八幡垣さんを訪ね、お話を伺った。





オストさんとの巡り会い

2012年1月30日。島根県出雲平野一帯に時折粉雪が舞う日。前日の出雲大社正式参拝を終えて、出雲キルト美術館にベルギーからダニエル・オストさんが来館した。

キルト作家の八幡垣睦子さんと同行、2013年10月の出雲大社「平成の大遷宮」奉祝事業の準備のためだ。美術館は築約200年の重厚な日本家屋。竹と白樺が飾られた囲炉裏のある空間の向こう、中庭に置かれた太い木の幹にもうつすらと雪が被り、窓枠に収まった絵画のよう。そこに座した

オストさんは、待ち受けの和菓子、練り切り「花卉雪（はなびらゆき）」を前にして「食べるには美しすぎる」と喜ぶ。館内各部屋に展示されているのは、八幡垣さんが手がけるしつらいも含めた作品だ。最も広い主座敷に八幡垣作品を次々と広げながら、素材や技法について、あるいは、色彩が重要だということや好きな花はハスだという共通の思いについて話は進んでいく。

「感覚的なものが、直感的に合うと感じた」というオストさんの言葉が、差し込み始めた冬陽の中に溶け込んでいった。

東寺でオスト作品に感動

今から6年前。八幡垣さんは京都の東寺で行われたダニエル・オスト展を見に出かけた。

オストさんは「花の建築家」とも称される世界的アーティスト。フラワーアレンジやフラワーアートの概念を超えた作品で、世界のロイヤルやセレブに愛され、世界中に多くのファンを持つ花の芸術家だ。

東寺でオストさんの作品に出会ったとき、八幡垣さんは今まで味わったこ

とのない感動を覚えた。誰もと同じように作品集を買い求めサインをしてもらったが、もちろんそのときはそれだけのことと思っていた。

まさか数年後、オストさんと同じ空間で自身の作品を展示できようとは、八幡垣さん自身も想像していなかった。オストさんが八幡垣さんの作品を知ったことが一つのきっかけとなって奉祝事業に結びついたのだが、まさに出雲の縁結びの神様のおかげで、大きなご縁をいただいたといえる。



22ページ上／出雲キルト美術館の館内。作品とともに、季節ごとに空間すべてをプロデュースする。下右／「ダニエル・オスト展 in 東寺」2006年（花材は矢竹、赤い実）。下左／「ダニエル・オストのクリスマス」2010年（花材は黄金ミズギ、プロテア）。



西洋と東洋の美の融合

神々の国、出雲の地で

奉祝事業に先立つ渡欧

八幡垣さんが生まれ育った山陰、特に島根県東部の出雲地方は、人々の暮らしに神々が寄り添っているところだ。それは、全国的には神無月と呼ぶ10月のことを出雲では「神在月」と呼ぶことからも、あるいは神々の国という言葉が出雲の枕詞のように使われることから、それはわかる。

普段の何気ない言動の中に、心で感じとり感謝する思いを、古より受け継いできたという自負心を失っていないのだ。

その象徴的な存在である出雲大社は、今年、約5年の歳月をかけて御本殿の修造を終えた。新しくなった御本殿へ御祭神がおかえりになった5月以降、数多くの奉祝行事で一段と賑わいをみせ、人々の気持ちも高揚している。

そして今秋、世界の最高峰に立つオストさんの作品が出雲の地に出現するという驚きは、彼の名を知る人たちにとっては特に大きく、奉祝の思いの上に期待と興奮が加わっている。

実は奉祝事業に先立ち、八幡垣さんは昨年10月、オストさんの展覧会のため渡欧した。ベルギー・セントニクラスにある修道院を飾るチャリティー展覧会だ。

「ベルギーに行った意味は大きかった」と八幡垣さんは言う。60年ぶりとなる「平成の大遷宮」は、多くの人たちにとって生涯でただ一度の巡り会いだ。オストさんとは縁を結んだ八幡垣さんにとってはさらに、自身が挑戦すべきことは何かを考え続け歩んできた、未来への答えを含んでいるものかもしれない。



上／新しく葺き替えられた出雲大社の国宝本殿の大屋根。右／出雲大社の大注連縄。25ベリシ／八幡垣さん作「瑞璃色の蓮」230×104cm、230×73cm、5連作。同下／「ダニエル・オスト展 in 金閣寺」2009年。竹炭を重ねて作った球体からのぞくのはイタリアンベリーとアストロメリア。

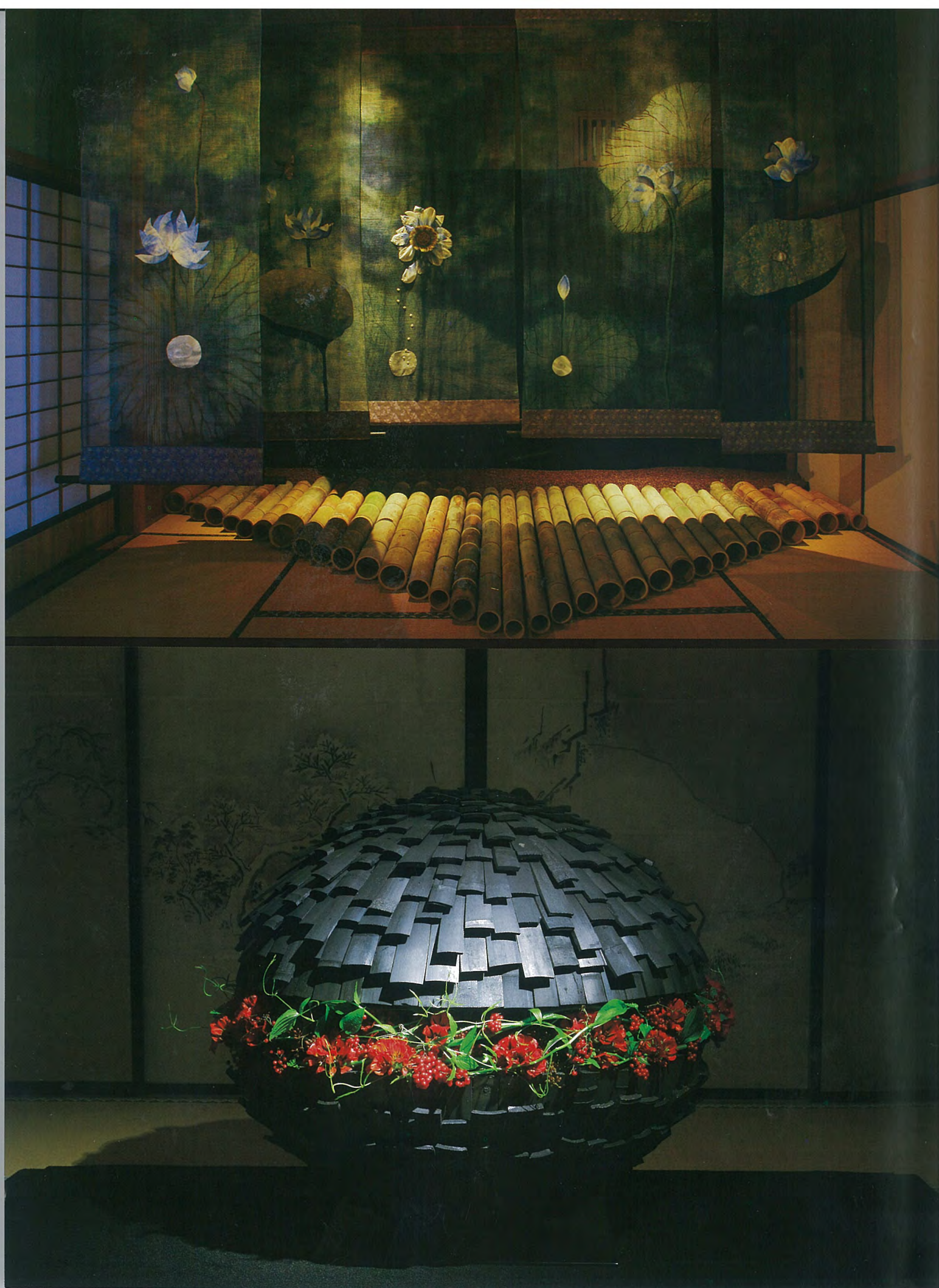


よみがえる、いのち

これまで、形として消え去っていく運命のいのちの布たちを何とか生かして残したいと作品にしてきた。江戸後期から大正期の布を使用し八幡垣さんが一針一針に込めてきた思いは、いのちの再生だ。この思いは、新しくすることよみがえり、永遠のいのちを伝える遷宮とまさにリンクする。

古布は、あるときは小さな端布となつて目の前に現れる。身にまとった女性の人生と、幾時代も人の思いを染み込ませたその古布を、「愛しい」と八幡垣さんは思う。奉祝事業のために求めた小袖裂も、いつものように「自分と呼んでいるような」気がしたという。今回使用する素材はほとんどが江戸後期の着物だ。作品構想の一つは、孔雀の羽を大きく広げてお祝いの気持ちを込めようというもの。

今、「大社（おおよしろ）」のことをいろいろに思いながら「古布と向かい合っている。」



神々に捧げる出雲奉祝の花

「神々に捧げる花」

二人の思いが呼応するのには出雲という地であったことが大きい。オストさんが出雲を訪れ最初に八幡垣睦子さんと会ったとき、こう語ったという。

「ついに日本の原点である出雲にたどり着いた」

重要文化財である京都の町屋、杉本家、世界文化遺産の仁和寺、東寺、金閣寺と歴史的建造物で作品を発表してきたオストさんにとっても、出雲は特別な思いを託す地なのだ。

八幡垣睦子さんにとっては、生まれ育った出雲は作品を生み出すエネルギーの源だ。自然や文化、そして縁あって関わり合う人々の思いも、針を持つ指先から自身の情念となつて伝わり、作品

となつて響くのだ。直感的に合うと感じた者同士に理屈など必要ないだろう。

「いのち」そのものを伝えようとする二人の深い祈りと感謝の思いが、遷宮奉祝という稀なる好機を得て、この秋、出雲で花開く。

出雲大社「平成の大遷宮」奉祝事業

出雲奉祝の花 ダニエル・オスト

織アート 八幡垣睦子

日時／2013年10月18日(金)～22日(火)

場所／出雲文化伝承館

島根県出雲市浜町520

「問い合わせ」

出雲ダニエルオスト&

八幡垣プロジェクト

(出雲キルト美術館内)

島根県出雲市斐川町福富330

電話／0853・72・7146



《ダニエル・オスト 花と煌きの小宇宙展》2010年



出雲文化伝承館／大地主の屋敷を移築した建物や、出雲流庭園、不昧公愛用の茶室「独楽庵」(復元)など文化や伝統を伝える。



八幡垣睦子

島根県雲南市に生まれる。時代を経た着物を素材として、織りや染め、刺繍、キルトなどの様々な手仕事を融合させた作品を制作する。2002年東京現代美術館にて個展「日本の彩」を開催。08年に布を通じて出雲文化を伝承することをコンセプトとしたアジアで初となるキルトの美術館を開館。空間プロデュースや建築、自然との融合にも力を注ぎ注目を集める。13年10月、世界的フラワーアーティストのダニエル・オスト氏と、出雲大社「平成の大遷宮」奉祝事業「出雲奉祝の花」を開催予定。



上／《ダニエル・オストのクリスマス in 帝国ホテル》2010年(花材は大王松)。下右／八幡垣睦子作「出雲朱鷺」。下左／八幡垣睦子作「綺羅の華」。



DANIEL OST
in IZUMO

出雲大社「平成の大遷宮」奉祝の花旅に密着しました。

ダニエル・オスト 出雲に いける

花・ダニエル・オスト 撮影・栗林成城 構成と文・近藤小桃
協力・出雲大社、出雲文化伝承館、出雲キルト美術館、神々の国しまね実行委員会
(財)フランドールセンター、ダニエルオスト事務局

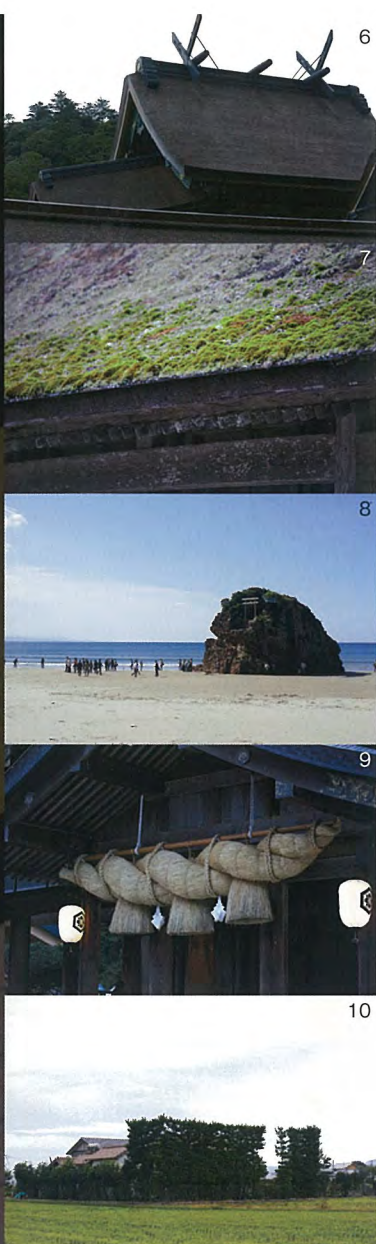
60年ぶりの本殿遷座を終え、善男善女で連日にぎわう出雲大社（いずもおおやしろ）。神在月の10月18～22日に「花の建築家」と称されるダニエル・オスト氏が「平成の大遷宮」を奉祝する花を捧げました。また出雲文化伝承館ではキルト作家八幡垣睦子さんと「出雲 奉祝の花・ダニエルオスト 八幡垣・織アート」展を開催。神々の物語と厳かな自然を深く理解し、温かい眼差しを注ぐ花旅に密着しました。

1・2／青苔や新藁など、出雲の自然からいただいた素材を彼はふんだんに作品に生かした。3・4／今回のために特別に各地から蘭や椿などの花も集められた。5／奉祝の花の細部に指示を出し続けるオスト氏。近寄りたいたいほど。6／大修理を終え、清新な姿となった出雲大社本殿。7・9／修繕を待つ社の檜皮もまた、苔むして美しい。堂々と大きい注連縄は2012年新しく奉製された。8／晴れ渡る稲佐の浜。神在月には八百万の神々をここで出迎える。10／北西からの寒風を防ぐ、この土地独特の美しい築地松。

出雲は、神と人と自然と物語が一つに溶け合った、日本にとって特別な土地です。

出雲大社で、そして、この日本海を臨む山陰の地で、日本の原点といえるものが、祈りとともに長い年月にわたって完璧な状態に体现されていました。この特別な伝統と風土に最大の敬意をこめて、出雲の神々と豊かな自然に花を捧げたいと思います。

― ダニエル・オスト



黄金色に輝き揺れる稲穂の動きが、見る人を圧倒します。その中心には、「八雲立つ出雲」を象徴するように多彩な色を集めた野葡萄の実の瑞雲。オスト氏が「今回のベスト・ワンかな」と語る大作は、土台のスポンジをまるで動く波のように大胆にカットする匠の技から始まり、数日かけて稲穂と野葡萄で埋められ、豊穡の大地が完成しました。●イネ、ノブドウ





ただ祈りを竹に託して

八雲山、鶴山と亀山の緑に抱かれて建つ出雲大社本殿。「平成の大遷宮」により5年の歳月をかけて修造され、5月10日に「本殿遷座祭」が厳かに行われました。本殿は70万枚もの新しい檜皮に葺き替えられ、頂には古来より伝わる「ちゃん塗り」された色鮮やかな鬼板や千木が。「この出雲大社の境内に立つと、視界のすべてが緑と茶の、樹木の色でしょう。これほど完璧に整った空間が他にあるだろうか。この場で、私に何ができるのか、と思うほどでした」と、オスト氏は初めて出雲大社に参詣した時の経験を率直に話



神迎えの道は稲佐の浜から神々が通る道。家々の清めの潮汲桶（おくみたけ）には、いつも草花が。

しました。「平成の大遷宮」を奉祝する花をいけるという機会に巡り合ったのです。

その最初の衝撃の後、彼はどうしたのか…。京都の杉本家、仁和寺、金閣寺…。と、高い評価を受けた花展の前もそうであったように、何度も出雲を訪問し、『古事記』英訳本を再び熟読したといえます。それほど日本の文化と美意識を深く理解して、花へ向かう姿勢と気迫を貫く花人がいるのでしょうか。そして今、彼は

「ここにはもう、新たな花も色も要らない。だから私は私の祈りだけを、出雲の

1／ひっそりと建つ命主社(いのちぬしのやし
ろ)。弥生時代の銅戈と翡翠の勾玉が発見され
た。2／出雲は今も神秘的風土。太陽の周りに
光輪ができ、太陽が3つに見える「幻日」と、
虹が逆さになる「環天頂」という珍しい現象
が重なり、オスト氏もスタッフも準備の手を
止めてしばし空に見入った。3・5／厳かな松
の参道、おみくじを結ぶ枝。緑がすべて濃い。
4／「出雲大社に捧げた竹の先端に、ここ数
日かまきりがいるよ」と彼が教えてくれた。

この竹は、オスト氏の祈りそのもの。ま
っすぐに伸びた竹をひたすら薄く削いで
いくことで、柔らかくしなやかな素材に
生まれ変わり、重なり合いながら天に立
ち上ります。足元の苔は、出雲大社の裏
を流れる清らかな川から。玉石は出雲の
浜から。出雲の自然と神々に捧げる、静
かな祈りの姿です。●タケ、コケ

今までに百以上の神社仏閣を訪ねてきましたが、
出雲大社に初めて参詣した時に、
私は鳥肌が立つのを覚えました。
本殿をはじめ境内の社と、それを囲む緑の
完璧な美しさは、長い年月を経ているのに
つい今生まれたばかりのようにみずみずしい。
これ以上、私に何ができるのか、と
思うほどでした。

―ダニエル・オスト

出雲大社

大国主大神（おおくにぬしのおおかみ＝
だいこくさま）を主祭神とする。『古事記』
の国譲りに創建神話があり、縁結びの神
様として名高い。国宝である本殿は大社
造とよばれる日本最古の神社建築様式。
「平成の大遷宮」により、本殿をはじめ
瑞垣内は厚さ1メートルもの檜皮葺の屋
根を葺き替えて、2013年5月に遷座が行
われた。ここでは「二礼四拍手一礼」と
拝礼する。

住所／島根県出雲市大社町杵築東195
電話／0853・53・3100 参拝時間／境内
は自由。参拝は6時～20時を目安に。御
守所及びご祈祷受付所は 8時30分～16
時30分

<http://www.izumooyashiro.or.jp>



薄緑色の竹に託して天に立ち上るように
いけたい」と、何度も竹の先端を見つめ、
飽くなき調整を繰り返していました。

出雲のすばらしい贈り物

祈りが形となった竹の余韻を胸に、続
いて出雲文化伝承館へ。「出雲奉祝の花・
ダニエルオスト八幡垣睦子・織アート」
展の会場です。圧巻の30作。

「出雲の自然は満ち足りています。緑も
花も、充分に人々の周りにあるのです。

京都や東京などの大都市で展覧会を開く
のとは違う。だから、この美しく素朴な
自然から多くの恵みをいただき、それを
私の花としたという思いが、ごく自然
にわきおこりました」というオスト氏。

とりわけ多くの人々を釘づけにしたの
は、出雲大社本殿の天井絵「八雲之図」か
ら飛び出したような、野葡萄の瑞雲の周
りを、稲穂の実りが巡る円状の大作です。

古代の「豊葦原水穂国」という美しい
名前を思い起こさせる稲穂の実りと、天
空との境にたなびく瑞雲。彼の体内に、
深い感動とともに吸収された出雲の美し
いものが、時を経て、このように花の滴
となって現れたのではないでしょう。

訪れた人々の「出雲へのすばらしい贈
り物ありがとう」という賛辞に、彼は
「いえ、出雲から多くのものを与えられ
たのは私のほうです」と答えたのです。



珊瑚水木を器にしたもう一つの作品です。腰掛待合から関戸を開けて別の露地へ進むと、直線の美しさを余すところなく見せた珊瑚水木と、ワイン色の蘭との組み合わせ。蘭はすべて小さな試験管の器に入っています。珊瑚水木の、曲線から直線への仕掛けが隣り合う二つの作品で展開。訪れた人を楽しませます。●コチョウラン、サンゴミズギ

純白の1輪は島根県の花、牡丹。季節外れの秋に、オスト氏のリクエストに応じて県内の大根島より届けられた特別な花です。錦木の枯れ色の茎を少しずつ矯めて、渋く、かつスタイリッシュな器に。明治期に建てられた、この地方独特の出雲屋敷の広縁に、ずっと前からそこにあるようなさりげなさで置かれていました。

●ボタン、ニシキギ





青い稲藁が、意志を持っているかのように立っている作品。長年にわたって出雲大社の注連縄を奉製する人々と一緒に制作したそうです。「日本の藁を使った芸術に感銘を受けます。注連縄を代々奉納する人々との制作は光栄なことでした」とオスト氏は語ります。それは天に上る龍にも、祈る人の姿にも似て。最後の日に彼は牡丹2輪を新たに加えました。●イネ



生垣や庭木として愛好される貝塚伊吹は枝がくねり、葉が巻き上がるような勢いをもっています。その濃い緑の葉の1束1束を丁寧に挿して、長時間をかけてこのスペクタクルな大作が完成しました。土台となる苔むした古木も貝塚伊吹も、出雲産のもの。背景に揺れるのは、いにしえの布を現代に生かした八幡垣睦さんの織のアートです。●カイゾカイブキ

ンブレラのような、ユーモラスな作品、大王松の美しい線を重ねて作られたの。出雲屋敷の土間の空間に、楽しげ鎮座していました。松の葉1本1本を、たな素材として洗練させた、オスト氏らではの作品です。●ダイオウショウ



実り豊かな出雲の山々の秋景色が、出雲屋敷の軒下にたわわにいけられていました。器はベルギー製の柔らかい色。柿の実や柘榴の実の素朴な姿と香りが大らかに、秋の温もりを伝えます。●カキ、ザクロ、ムベ、マユミほか

大王松の魅力をさらに飛躍させて、この床の間では逆さに用い、葉元のユニークな配色を際立たせています。二重に重ねることでドライになっても、美しい器として残ります。八幡垣さん制作の古布を使った菊の掛け軸と共に、深まる秋を感じさせて。●キク、ダイオウショウ



この作品はおそらく、竹の器が主役なのでは、と思うほど、まっすぐに伸びた大きな竹三本の潔い存在感が目を引きま。グロリオサをいけた器の口が障子の方を向いているので、花は竹の向こう側に控えめに浮かんでいるよう。花と器の粹な合わせ方です。●タケ、グロリオサ



出雲はそのままの自然が質実に守られ、
緑や花に満ち足りた幸いなる地です。
だからこそ、今そこにある自然の恵みが「花」になる。
出雲はもう一度私に原点に
立ち帰る喜びを与えてくれました。
「松のことは松に習え、竹のことは竹に習え」
といういにしえの言葉のように。

— ダニエル・オスト

松家庵・松緑

代、日本の山々を空の上から眺
このように見えたのではないか
本はなだらかな起伏となって調
ら、一つ一つは濃い薄い、大き
と千差万別に盛り上がる苔の、
な緑の共演です。そして中心に
浮かぶ紅葉。その向こうには、
ぐ稲穂がたっぷりといけられて
●コケ、モミジ、イネ



静かな庭の一角。庭石に溶け込むように
息づくのは、まっすぐな錦木を丁寧に矯
めて流れるようなフォルムとなった、ユー
ーモラスな作品。これはカタツムリでし
ょうか。覗き込むと、みずみずしく潤っ
た苔から、純白のカラーがそれぞれに上
を指しています。●カラー、コケ、ニシ
キギ



鮮やかな緑と赤の色の対比が強いインパ
クトを与えます。オスト氏の展覧会の度
に、この作品を待ちわびる方も少なくあ
りません。規則正しく並ぶ黄金水木から、
あふれ出る赤い実の量感。周囲の空気を
がらりと変えています。●イタリアンベ
リー、オウゴンミズキ



木目が美しい1本のまっすぐな柱もまた、
出雲の自然からの贈り物であり、オスト
氏の新たな世界です。上部には、薄く削
られた木肌が幾重にも優雅な曲線を描い
て、木という素材のもつ温もりと、香り
高さをも感じさせます。たくさん挿した
同系色の蘭は髪飾りにも見えて。●コチ
ョウラン、スギ



飛び石のように、作品が床の間へと続い
ています。出雲で生まれ育った柳二種を、
それぞれの茎の流れや特徴を生かしつつ、
リズムカルに配して。花の数は少ないの
に、白い蘭と牡丹が明るく浮き立って
います。●コチョウラン、コウリヤナギ、
ウンリュウヤナギ、ボタン、ニシキギ





1／神は細部に宿るといのように、出雲大社の境内の周囲にも心安らぐ風景が広がって。2・3／杉玉のようなオスト氏の作品にも、竹を筏に組んで枯れ蓮や花を挿した器にも、細部にまで彼の美意識が宿る。

二〇一三年 神在月の花風土記

神在月の出雲に、この花展のためにベルギーやロシアなど世界各国から、オスト氏のスタッフが100名ほど集結しました。黙々と、徹夜も厭わず、彼が求める高度な要求に応える精鋭たちです。張りつめた緊張感のなか、完成まで丁寧な手仕事を積み重ねる姿勢が、心に残りました。

無事にオープンを迎えると、オスト氏も、彼と共に花と織の芸術を演出した八幡垣さんにもこやかな笑顔。ベルギー大使ご夫妻、出雲大社宮司千家ご夫妻、多くのゲストを迎えてレセプションが開かれ、花風土記はいっそう華やきます。

「出雲は日本の原点といえるものが、長い年月にわたって完璧な状態に保たれています。自然が十分に満ち足りています。これ以上私に何ができるのか、と思うほどでしたが、この出雲の風土に直接向き合っただけで花をいけながら、もう一度私も原点に立ち帰りたいという思いを強くしました」と、彼は改めて、感謝の思いを伝えていました。

ル・オスト

世界的フラワーアーティスト。1955年生代のころよりベルギー、ヨーロッパをはじめ花の世界大会でタイトルを受賞。ベルギーイタルウエディングや世界各国の歴史的建台にした作品を発表。「花の建築家」「花の」と称され、植物を素材とした彼独特の華麗デザインは、花のアートに新風を吹き日本の文化や自然に深い思い入れがあり、本家、仁和寺、東寺、金閣寺等で開催した世界的にも高い評価を受けた。



4・5／野葡萄の実の色づきによって、細かく分類し、稲穂同様、ピンセットで付けていく作業風景。6／彼の作品は隠れた部分も完璧。7・9・10／秋の枯れ葉をひたすら重ねていく作業、杉の葉をまとめる人、コケを延々と植える人…、繊細な手の動きにみとれてしまう。8／3人がかりで秋の実りを仕上げる。11／出雲の竹で美しい曲線を描く大作は、大胆かつ緻密な作業が続く。



12／出雲の地酒の鏡割りで盛り上がった。「彼はもう一人のベルギー大使です、心強い」というベルギー大使の挨拶に多くの拍手が。むしろオスト氏は世界への日本大使かもしれない。13／千家宮司との歓談は尽きない。14／ドレスアップしたスタッフの髪飾り。さすが！15／長女ニールさんもかけつけて彼をサポート。



出雲キルト美術館

江戸期など古い時代の着物の布地に、織り、染め、刺繍などの手仕事を融合させた八幡垣睦子さんの作品を展示する。
住所／島根県出雲市斐川町福富330 電話／0853・72・7146 開館時間／10時～17時 休日／毎週水曜、第三日曜
入館料／大人500円、高校生以下300円
<http://www.yawatagaki.com>



出雲文化伝承館

明治29年に建てられた旧江角邸を中心に、不昧公ゆかりの独楽庵、出雲流庭園など、出雲の文化と伝統を伝える。
住所／島根県出雲市浜町520 電話／0853・21・2460 開館時間／9時～17時 休日／月曜（祝日の場合は開館）
入館料／無料（特別展は観覧料が必要）
<http://www.city.izumo.shimane.jp>



